

散歩とラジオと手紙

東京大学 特任教授・建築学
松村 秀一
Shuichi Matsumura

変化する日常

痩せた。半年で五キログラムは痩せたかどうか。痩せよう意識したことがなかっただけに自分でも意外な変化だ。

新型コロナウイルス災禍に伴う巣ごもりと関係があることは間違いない。食欲が落ちていく訳ではないし、特段の運動をしている訳でもない。変化の原因ははっきりしている。飲み会がなくなったことだろう。

私の場合、職業柄だろうか、午後六時頃から始まる研究会や委員会が結構ある。週に三〜四回程度はあったろう。そして、そうした会議

の後には飲み会に流れるケースが多い。大体二〜三時間は会話と飲食を楽しむ。それが、三月以降の半日間皆無になった。つまみの量もアルコールの量もぐっと減った。巣ごもり減量の主因だろう。

「社会基盤」ってこれか！

事程左様に私の日常はテレワークによって大きく変化している。そして、その変化の中で、土木分野でよく使われる「社会基盤」というものの有難みを一生活者として実感し始めている。

よく考えてみれば、新型コロナ以

れこれ半年間、毎日四〇分程度はそぞろ歩きを続けている。歩いてみると、これまで全く知らなかった近所の店や神社や道や自然を発見したり、犬の散歩をしている人やジョギングしている人が意外に多いことを知ったりと、なかなか面白い。

次はラジオ。五〇年程前、中学生の時代には聴いていたが、長らくタクシーの中か散髪屋でしか聴かなくなっていた。今やパソコンやスマホでも聴けるが、特にパソコンの画面にはあきあきしている。あえて単機能のラジオを購入した。たかだか二、〇〇〇円強の品物である。目を休めながら、あちらこちらの局にチューニングして、聴くともなく聴いていると、テレビでは味わえない話術、ためになったり気を緩めてくれたりする話題、意外な音楽等々、結構楽しめるので驚いている。

そして、もう一つは手紙。テレワークではコミュニケーションの種類に限られるし、とても効率的。それだけにどこかバランスが悪い。そこで、時間もあるし、心の平静も保てるし、筆ペンを買ってきて、以前

だと余程の時にしか書かなかった手紙を書くことにした。ただし、年下の世代の方にいきなり手紙を送りすると先方が驚いてしまうだろうから、こちらはメールのまま。お世話になっている年長の方々に、機会があれば手紙をお出ししている。

これだけのものをわずかに八四円で大抵二日以内に先方に届けてくれる。あらためて郵便という社会基盤の有難みを感じている。

暮らしの再編集が始まる

とても個人的な話に終始してしまっただけ、「新しい日常」が標語化しているこの時期、多くの人が、私と同じように以前とは異なる要素を自分の暮らしの中に組み込むことで、ストレスフルな時代を乗り越えようとしているのだろうと思う。

そして、散歩にまちの道や建物群が彩りを添え、電波がラジオのオリエンタリテイ溢れる豊かな世界を届けてくれ、郵便が手紙に込められた時間と気持ちを運んでくれるよう

前の暮らしでも、朝起きてバスや電車に乗って通勤し、建物の中で働き、通信環境を使い、まちなかで飲食し、またバスや電車に乗って帰宅するという具合に、社会基盤には多くの恩恵を受けていた。ただ、これらは何十年も続く日常、決断を要しない自然な動きなので、自分と社会基盤の関係を意識することはほぼなかった。

ところがである。いわゆる第一波が来て、大学がほぼ閉鎖状態になり、学外の委員会の類もオンライン会議だけになった。初めのうちは何とも思わなかったが、一日のうち、通勤時間分の約二時間半、ほぼ同じ程度の飲み会分の時間、つまり少

なくとも合計五時間を持って余すこたなくなってくる。ぱったり会った人や、会議の前後に「ちよつと、ちよつと」と声をかけてくる人等と雑談や密談をする機会も全くなかった。勢い、自宅の同じ机に同じ姿勢で同じパソコン画面を見ながら終日過ごす毎日になってしまった。

そんなことでは心身の健康は保てないから、自然と、あるいは意識的に自分の一日に新たな要素を加えることになる。私の場合はまず散歩。メタボなのでできるだけ歩こうという保健指導を受けても「はいはい」と受け流し、通勤時の徒歩で十分と考えて、無目的な散歩など思いも寄らなかつたような私が、か

に、それらの要素はまさに既存の社会基盤に支えられている。これからは、それをすべての人が自分の暮らしのために再編集する時代に入っていく訳だ。

社会基盤を築いたり維持したりしている建設産業も、この一人ひとりの暮らしの変化と再編集の動きを実感し注視しておいてほしいと思う。



散歩の途中でばったり。それも散歩の楽しみ。近くの緑道で犬の散歩中の建築家・隈みかんぐみの竹内昌義さん(右)と痩せる前の筆者(左)。(竹内さんのFacebookより)